

【最優秀賞】（中学生）

会話

栗東中学校 三年

「ごめん、もうあと一回だけ言って。」

私の母は耳が聞こえない。高い補聴器を買ってつけても、大きな音、救急車の音が微かに聞こえるようになるくらいだ。外したらもう何も聞こえない。大きな声で後ろから呼びかけてもやかんのお茶が沸いても気づくことができない。それぐらい重い障害なのだ。そのため困ることは数え切れないほどある。

耳が聞こえないことによって生じてしまう困ること。私が教えてもらったことの中で例を挙げると、字幕がない動画、映画などが観られなかったり、電話がかけれられなかったり出られなかったり、発音がおかしくなってしまうりすることなどがある。そのため、人に正しく聞き取ってもらえなくて話すことすら難しくなる。そして、最も困ることは、相手の話していることが分からないことだ。耳が聞こえない人の中でも人が話していることの聞き取り方は異なるが、私の母は基本相手の口の動きを読み取って会話を成り立たせている。しかし、耳を塞いで一度体験してみてもほしい。これがかなり大変なのだ。人によって口の大きさや、動き、速度が違う。その

ため、長時間読み取っていたら疲れてしまう。そして第一にすべて読み取れるわけではない。いつも私の母は読み取れなかったとき、毎回少し悲しそうに謝り、「もう一度聞かせてほしい」と言う。しかし昔私はそれに構わず、文句を言ったことがある。

私が幼い頃、言いたいことがなかなか伝わらず苛立たしく思ってしまった、

「もういい。お母さんと喋るの面倒くさすぎるよ。」と怒ってしまったことがあった。その時の私は、何度も言っているのに伝わらないもどかしさ、煩わしさに鬱憤が溜まっていて自分勝手だった。母も出来ることなら耳が聞こえるようになりたいというのに。母が悲しそうにしていることにも知らないフリをして怒ってしまった。私はかなり後悔した。伝わるまでもっと話したほうが良かったのではないか。そもそも紙に書いて渡したらすぐ伝わったのではないか。しかし私は何度も言ったしそこまで悪くないのでは。加えて謝りに行くのもなんだか気恥ずかしい。たくさん考えて、思いついた案は「ごめん」と書いたくしゃくしゃの折り紙をベランダで洗濯物を干している母の近くに投げるといふなんとも幼稚なものだった。しばらくすると母が二階から下りてきて、まだくしゃくしゃのままな、少し不格好だが丁寧に折りたたまれた折り紙を手渡してきた。広げて

みると中には「私もごめんね」と書かれていた。

この後私と母はゆっくりと筆談も交えながらたくさん話した。昔から音が全く聞こえないこと、補聴器を外すと誰かがどれだけ叫ぼうが聞こえないこと、救急車の音もお茶が沸いた音も聞こえないこと。大きく口を開けてゆっくり喋ってくれたら読み取りやすく助かること、それでも読み取れなかったら筆談にしてくれると嬉しいこと。他にも今まで大変だったことや困ったことも教えてくれた。

私はその教えてもらったことを活かして、少しでも耳が聞こえない障害を軽減出来るように、言葉が伝わりやすくなるように母の意見を聞いて話し合っ
てこれからも、たくさん会話が出来るようにしていきたい。

【優秀賞】（小学一〜六年生）

ぼくのゆう気がたからもの

大宝小学校 三年

ある日ぼくは友だちとけんかをしてしまいました。

それはすきなアニメがちがったからです。

「こっちのほうがかっこいい。」

「こっちのほうがつよいよ。」

ぼくはそこで

「そっち、よわそうじゃん。」

そこで友だちが、

「そっちのほうがよわそうじゃん。」

おたがいだんだんきたないことを言って、ふん

きがわるくなっていました。それで先生に言うこ

とにしました。

でも先生は、プリントをくばったり、しんどい

人のようにすを見にいたりして、いそがしそう

で、話を聞いてくれなさそうです。

そこでぼくが先生に、

「二人だけでかいけつします。」

と、ゆう気をふりしぼって言いました。

それから友だちと話合いました。そこでぼくが

言いました。

「どんなところがいやだったの。」

友だちが言いました。

「そっちよわそうじゃん。みたいなこと言われて

いやだったんだよ。」

ぼくがいました。

「そんなこといってごめんね、つきからは、しな

いよ。」

「いいよ。」

「ありがとう。」

「でもぼくもいやなことがあったんだよ。」

「なに。」

「ぼくもおんなじこと言われていやだったんだ

よ。」

「それがいやだったんだ。」

「ごめんね。」

「いいよ。」

そこで先生が来ました。

「だいじょうぶ。」

と言ってきました。そこで二人で

「二人でかいけつしました。」

そういったら先生がびっくりして、こけてしま

ました。そしていまでもほめられています。そ

して、それからはその子とあまりケンカをしなくな

りました。この時のぼくのゆう気は一生わすれら

れないたから物になりました。

【優秀賞】（小学一〜六年生）

「当たり前じゃないこと」

大宝東小学校 六年

私は、人権学習を通して、「当たり前」という言葉は、誰に向けたものでもないと分かりました。そして、人が言う「当たり前」が出来なくても、自信を無くしてはいけないということを、この作文で伝えたいです。

人権学習の中で、障害を持った江川さんのお話を聞きました。江川さんは、生まれつき障害があり、小さいころは病院で過ごしていたそうです。友だちと一緒に学校の学校に行けず先生と二人きりで学習する毎日が、江川さんにとっての普通でした。

江川さんに、「今、学校で友だちと一緒にいられることは、当たり前ではない。」と聞いたとき、「当たり前」について深く考えることができませんでした。自分には、家族がいて、友だちがいて、ちゃんと学校に通うことができている。けれど、学校に行くことができない人や、友だちと関われない人もきっといます。このようなことを考えるたびに「当たり前」が「当たり前じゃないこと」だと分かります。そして、人には得意な

こと、苦手なことがそれぞれにあると思います。ですが、苦手なことを、人に「できて当たり前」と言われ、できる人とできない自分で差があるように感じたことが、私にはあります。でも、「ちがいがい」こそが人を引き立てる個性になると私は思います。なぜなら、人がみんな同じものを得意として、同じものを苦手としていたら、「自分らしさ」は失われていくと思います。だからこそ人それぞれ「好き」や「得意」を大切にし、「嫌い」や「苦手」があっても自信をなくさず、そんな自分を認めてあげれば、自分自身を「好き」だと言えると思います。そして、身の回りの人に対しても同じことをしてあげれば、「当たり前」という概念は、少しずつでもなくなっていくと思います。「人権」は一人ひとりにあるものなので、決して「当たり前」という言葉で片づけられないほしいです。

私は、六年間の学びをこれから的人生に活かしていきたい。「ちがいがい」を「個性」として考え、自分を好きになり、自信を無くさないようにしたいです。そして、身の周りにいるたくさんの人を大切に、日々を過ごしていきたいです。

【佳作】（小学一〜六年生）

いじめと私と周りの人

治田東小学校 五年

みなさんはいじめられたりいじめたりした経験はありますか。いじめられる人、見ていただけの人、見て見ぬふりをする人。その人達はみんないじめている人達です。見た目や性格をバカにするのは差別やいじめです。今回はいじめられた時といじめている人をとめた私の二つの経験を話します。まずは私がいじめられていた時のお話をします。私は一年生の時に友だちがいませんでした。一人で本を読んでいるだけでした。ある日のことでした。みんなが教室からいらない日に遊んでいた男の子がもどって来ると言いました。『ぼっちだー。やーいデブ女。』と言われました。私はその時、少しぼっちやりとしていたのです。私は悲しくなり、一人を『ぼっち』と言われるなんてひどいと思います。でも相談することも言い返すこともできません。私はやみの中につきとおとされた気分でした。それから一か月たちました。活発で友だちがたくさんいる女の子が『ねえ、その本おもしろい？』と明るく話しかけてくれました。私はとてもうれしくなり、うなずくと

「そっか。ねえ、私と友だちになろう。」と言ってくれました。私はびっくりしましたが、すぐにならずきました。それから私はあまりが外れたみたいになりました。いじめられることも減りました。今もその子に感謝しています。もう一つは、私が四年生だったころのお話です。ある日、図書室に行った後、ろをか歩いている時に一年生の弟の友だちと二、三年の子が三人程いました。一年生の子に他の子は悪口を言っていました。私は、なんとかしようとして先生を探しましたが周りに先生方はいませんでした。そこで私は勇気をふりしぼり、決心しました。その後、「悪口はよくないし、一年生もいやがっているからやめてね。」と言いました。すると、二、三年の子はにげてしまい、間もなくチャイムがなりました。あわてて教室にもどりましたが、心はとても晴れ晴れとした気分でもどりが過ぎました。私は一年生のとき悲しい思いをした分、人はやさしくできる人が多いのではないかと思います。お母さんもとてもほめてくれてうれしかったです。みなさんも辛い経験はあるかもしれませんが、もしもだれかがいじめられていたり、困っていたりすると、自分がいじめられる声をかけたり大人に相談したりして、自分のできることをやり、楽しい時間を過ごせるといいですね。私も実せんをしていき

【佳作】（小学一〜六年生）

原爆のおそろしきについて

治田西小学校 六年

私は、平和学習を通して、原爆のおそろしさを
知ることができました。

なぜ原爆について知れたかというところ、平和学習
で広島に行き、飯田國彦さんという方から被爆し
た時の話を聞いたからです。飯田さんは被爆者の
中でも近距離被爆者と呼ばれるめずらしい被爆者
で、その方から話を聞くことができました。飯田
さんは、原爆についてたくさん教えてくれましたし
た。原爆のせいではかみかみおちたり、身近な人
が亡くなったりとあらゆる影響を話してください
ました。他にも、飯田さん自身の病気について話
してくださいました。放射線や黒い雨の影響でか
びん性大腸炎や頭痛・ひん血・脳しゅうようや白血
病などの様々な体調不良におそわれたそうで、私
だったらたえられないし、薬も飲む気にならない
から、長生きできないです。でも、そんな中、飯
田さんは八十代まで生きていてすごいなと思いま
した。話を聞くだけでなく、実際に、原爆が落と
された「原爆ドーム」を見に行きました。そこで
ガイドさんに話してもらっていた時にたくさん
事を感じました。実際に原爆ドームを見て、写真

や動画などでは伝わらないおそろしきを感じまし
た。でも、そんな悲さんな事があった所も、今
は、路面電車が走っていたり、川の水も流れてい
たり、船やヨットもありました。八十年前は焼け
こげた場所だったのに、今は復興がすすんで、他
のまちと同じくらいきれいさになっていまし
た。そのことから、「あきらめなければできるとい
うことを知りました。原爆のおそろしきを知
るために、資料館にも行きました。資料館では、
原爆の影響で、やけどげた服や弁当や自転車など
様々な物が展示されていました。物や写真などの
展示物を見て、原爆の影響力は、強大人だと思
いました。

原爆ドーム・平和記念資料館・飯田さんの話を通
して、私はこれからできることを考えました。私
にできることは、この平和学習を通して学んだこ
とを「伝える」ことです。飯田さんのように当時
のことや原爆のことなどを伝えて、色々な人た
ち知ってもらうことが大切であり、自分だけでな
くみんなができることだと思います。伝える内
容は原爆のおそろしきだけでなく、平和について
や戦争についてなども伝えていけたらなと思っ
ています。より多くの人に平和や原爆などにつ
いて知ってもらうためには私だけでなく、多くの
人に伝えてもらう事も大切だと思います。だから、
これを読んだあなたたちにも伝えてほしいです。

【佳作】（小学一〜六年生）

友だちを大切にする

大宝西小学校 二年

わたしの人けん作文のテーマは、友だちを大切に
にするです。わたしは、これまで友だちにつよく
あたったり、つよくおこってしまったりすること
がありました。自分でも分かっているのに言っ
てしまう時があるので、友だちを大切にしなければ
ならないと思い、作文に書こうと考えました。

もし、つよく言ってしまった時は、友だちに
「つよく言ってごめんね。」

とやさしくあやまりたいです。大切な友だちの心
をきずつけないようにいしきしていきます。

これからは、友だちにやさしい声かけや、友だ
ちとお話をしたり、楽しくあそんだりして、楽し
くやさしい自分とやさしくて、大切な友だちで楽
しい学校生活をおくります。

【佳作】（中学生）

無意識の差

葉山中学校 二年

以前、「ほっとタイム」とよんでいる人権学習の時間で、男女差別と男女の区別について学ぶ授業があった。初めに先生が出したのは、いくつかの場面を見て、それが差別か区別かを答えるクイズだった。私は、頭の中で、何となく理解しているつもりで問題に取り組んだが、答え合わせをすると、自分が差別だと思っていたことが区別だったり、その逆だったりした。正しいと思っていた自分の判断が間違っていることに少し驚いた。

授業を通して一番感じたのは、「理解しているつもり」と「本当に理解している」ことは違う、ということだ。私はこれまで、差別とは「悪いことをしてはいけない」という程度の認識しかなかった。しかし実際には、差別と区別にははっきりとした線引きがあり、その線を正しく見分けられ

なければ、自分の行動が相手を傷つけることになる。例えば、「男の子だから力仕事をしなさい」というのは性別だけで役割を決めてしまっているため差別になる場合がある。一方、「女子更衣室と男子更衣室を分ける」ということは、体のつくりやプライバシーのための必要な区別だ。こうして例を出されると理屈では分かるのだが、日常生活の中では、その判断が意外と難しい。

さらに授業の中で気づかされたのは、私は頭では差別だと分かっているけれども、いざその場面に直面すると無意識のうちに差別をしてしまっているかもしれない、ということだ。たとえば、体育祭の練習で男子のほうを多めに応援してしまったり、係決めるときに「これは女子がやったほうがいい」と心の中で思ってしまったりすることがある。そんな時、自分の言っていることと行動が一致していないと感じる。本当に差別をなくすためには、この習慣のような考え方を直す必要があると思った。

先生は「差別と区別の違いを理解していないことを自覚していない大人が多い」と話していた。最初は「大人なのに、そんなことも分からないの？」と少し不思議に思った。でも考えてみれば、私だってまだ完璧に理解できていない。大人になっても、自分の中の思い込みや昔からの習慣がそのまま残ってしまえば、気づかないうちに差別をしてしまうかもしれない。だからこそ、今のうちから正しい知識を身につけることが大切なのだと思う。

授業を受けて、私は二つのことを心に決めた。一つは、差別と区別の違いを正しく判断できる人になること。もう一つは、自分がされて嫌なことを、相手にもさせない人になることだ。特に二つ目は、相手の立場を想像する力が必要になる。自分がされて気づくことは多いが、相手がされているときに気づける人は少ない。だからこそ、そういう人になりたいと思う。

差別は、わざとではなくても起こってしまうこ

とがある。しかし「知らなかった」「悪気はなかった」では相手の気持ちは元には戻らない。普段から「これって本当に必要な区別なのか？」と自分に問いかけ、考える習慣を持つことが大切だと思う。そうすれば、無意識の差別を減らすことができるはずだ。

大人になってから考え方を変えるのは大変だと聞く。だから私は、今のうちから差別と区別の違いを正しく理解し、行動と言葉が一致した人になりたい。以前の授業は、そのための大切な第一歩になったと思う。これからも日常の中で学んだことを意識し続け、小さな場面でも正しい判断ができる自分でありたいと思う。そうして少しずつでも、差別のない社会に近づけていきたい。

【佳作】（中学生）

人権を守ることの大切さ

栗東西中学校 一年

人権とは、すべての人が生まれながらに持っている尊厳と自由を保障するものであり、これが守られることで僕たちは安心して生活し、自分らしく生きることができます。人権が尊重されない社会では、差別や暴力、不公平が広がり、人々は恐れや不安の中で生きなければなりません。一方、人権を大切にすると社会では、互いの違いを認め合い、助け合うことができ、民主主義や平和も維持されやすくなります。つまり、人権を守ることは一部の人のためではなく、すべての人が安全で豊かな人生を送るために欠かせないものなのです。人権を守ることは社会を支える根幹を作ることです。僕たちが生きる社会では、たくさんの人々がそれぞれの生活を送っています。その中で、すべての人が平等に尊重され、安心して生きる権利があることを、僕たちは忘れてはいけません。権利には様々な種類があります。例えば、僕たちも普段から使っている「自由に意見を言う権利」は、人間が自分らしく生きるために欠かせないものです。また、「教育を受ける権利」があることは、日本に住んでいる僕たちにとっては当たり前

のことで、ついつい忘れてしまいがちです。

しかし、世界に目を向けてみると、戦争や貧困、差別などが原因で、自由に意見を言えなかったり学校に通えなかったりする子どもたちがいます。その子どもたちにとっては、今紹介した二つの権利は、喉から手が出るほど欲しいものかもしれません。とても悲しいことですが、これが僕たちの生きる世界の現実でもあります。

僕たちができることは、小さなことから始めることです。友達が困っているときには手を差し伸べ、誰かがつらい思いをしているときにはその人の声に耳を傾けることが大切です。また、自分が持っている権利をしっかりと理解し、他の人にもその権利を尊重するように心がけることが重要だと思います。

さらに、人権を守るためには「知ること」もとても大切です。ニュースや本を通して世界で起きていることを学ぶことで、自分が知らなかった問題に気づくことができます。知ることによって初めて、何が正しくて何が間違っているのかを考えられるようになります。そして、学校や家庭で友だちや家族と意見を交換しながら、お互いの考え方を尊重することも、人権を大切にすることの第一歩になると思います。

また、人権を守る姿勢は、日常生活の中にもたくさんあります。例えば、「相手の話を最後まで

聞く」「ちがいを受け入れる」「困っている人にやさしく声をかける」など、小さな思いやりが積み重なることで、みんなが安心できる社会が生まれます。

このように書いている僕ですが、人権を守る大切さに気がついたのはつい最近でした。

僕は人を笑わせるのが大好きで、いつも「何かいいネタはないかな」と探していました。面白かったテレビをネタにしたりゲームの話ネタにしたりして、友だちと笑い合う毎日でした。そのネタの中には、障害者をバカにすることも含まれていました。大きい声でよくわからないことを一人喋っている人を見つけたとき、「いいネタになるぞ」と思います。帰り道に見かけたら、「あの人変だよね」と笑いながら友だちに言います。そうすると、周りにいる友だちは「本当だ、変な人がいる」と笑ってくれます。だから、それがおかしいことだとは思っていませんでした。その人のことを、自分とは「全く違う人」だから、バカにしてもいいと思っていました。

しかし、中学生になって、人権の学習をしていくと考えが変わっていききました。きっかけは学習の中である人と出会ったことです。その人は小寺さんという人です。

小寺さんは、生まれたときに心臓が止まっていたことで脳に障害が残り、体にも麻痺がある人で

す。小寺さんの話し方は自分とは違ってとてもゆっくりで、今までの自分なら笑っていたと思います。しかし、小寺さんのこれまでの生き方を聞いて、小寺さんは、自分と「全く違う人」ではないと気づきました。

小寺さんは障害者差別をなくすために様々な活動をしています。障害とうまく付き合うための努力をたくさんしています。たまたま障害も何もなく生まれてきた自分には想像もつかない努力だと思いません。だから、今までの自分のように、一生懸命に生きている人をバカにして笑うことはおかしいことだと思いました。僕は人権の学習を通して、自分は本当にひどいことをしてしまったと後悔しました。

そして、「このままではいけない。何か役に立ちたい！」と思い、この人権作文を書いていきます。

僕は人権学習があって、自分を知ることができました。この作文が、僕にとっての「人権学習」のように、みなさんの知る機会になったら嬉しいです。

僕は、これからもっと周りの人に寄り添い、相手の気持ちを大切にできる人になるために、人権学習以外でも、人権や差別の現状を知る機会を増やしていきたいです。みなさんはこれからどんなことを知っていききたいですか。